

戦後の「女学生」を対象とした少女雑誌の展開と限界  
—『女学生の友』(小学館)・『女学生コース』(学習研究社)を中心に—  
A study on the developments and limits of girls magazines for aimed at “JOGAKUSEI”  
during after the second world war of period in popular many girls magazines for  
amusement “JOGAKUSEI NO TOMO” and “JOGAKUSEI COURSE”

田 中 卓 也

要約

戦後の「女学生」を対象とした二誌は、女子中学生・高校生ら「ジュニア」世代を誌面内容や附録などを工夫しながら、巧妙に読者に取り込んだ。誌面づくりのために、生き残りをかけて少女の心を引き留めることに苦心した。しかしながら両誌は、発刊および廃刊の時期は異なるものの、「女学生」としての教養の習得をめざすことは忘れておらず、クイズや懸賞形式を採用しながらも誌面に学習教材としてのものを掲載し続けた。しかしながら『女学生の友』はその後、ジュニア向けファッション誌『プチセブン』に、『女学生コース』は、『中1コース』、『高1コース』のように学習内容を残しながらも、ファッション、マンガなどの要素をとり入れたものへと変化を遂げることになり、「娯楽」や「流行」を求める少女雑誌の台頭を促すことになった。

キーワード：『女学生の友』、『女学生コース』、ジュニア、性、ファッション

- I. はじめに — 本研究の目的の先行研究の検討 —
- II. 『女学生の友』の発刊
- III. 『女学生コース』(学習研究社)の登場
- IV. おわりに — 『女学生の友』と『女学生コース』の展開と限界 —

I. はじめに

— 本研究の目的の先行研究の検討 —

本研究では、『女学生の友』(小学館)および『女学生コース』(学習研究社)の二誌に着目し、第二次世界大戦後の日本で発刊された「女学生」を対象とした雑誌がいかに発刊され続け、その後の廃刊に至ったのかについて考察・検討を試みるものである。

執筆者はこれまでに、田中卓也「学習雑誌とファッション雑誌との葛藤—小学館学年別

学習雑誌『女学生の友』を中心に—」(日本子ども学会第13回子ども学会議ポスター演題口頭発表済、静岡大学浜松キャンパス、2016年10月)、同「少女雑誌にみる少女像と学習意識の変容—小学館『女学生の友』および『プチセブン』を中心に—」(日本乳幼児教育学会第26回大会口頭発表済、神戸女子大学ポートアイランドキャンパス、2016年11月)などがある<sup>1)</sup>。これら一連の研究では、同誌が戦前期に発刊されていた少女雑誌を購読していた

<sup>1)</sup> 『女学生の友』は、別冊の発刊にも力を注いだ。1966年には、『別冊女学生の友』、翌年には『別冊女学生の友』が改称され、『ジュニア文芸』となり、月刊発売となった。翌年には『デラックス

女学生の友』が創刊となり、季節ごとに刊行された。1971年には『ジュニア文芸』が廃刊となり、1973年には別冊付録が小冊子となり、『プチプチ』と改称されて発刊された。

とみられる「女学生」にこだわり、小説にはじまり、長編短編の物語、歴史読み物、詩、短歌、俳句などの彼女らの教養習得のための作品投稿にいたるまで、いわば戦前の少女雑誌の流れを汲もうとしてきたが、戦後の個人主義や多趣味・多文化（ファッションやユーモア企画など）の時流に勝てず、ファッション雑誌への変更を余儀なくされる経緯について見出してきた。では、戦後に出された女学生を対象とした他の雑誌の事情も知るべく、他誌についても調べるようになった。

先行研究では、今田絵里香『少女の社会史』（勁草書房、2007年）、本田和子『女学生の系譜』（黒土社、1990年）、川村邦光『オトメの祈り』（紀伊国屋書店、1993年）など戦前期の少女をとりあげた雑誌分析研究などいずれも精緻な研究が存在している。しかしながら戦後の女学生雑誌の読者意識に焦点を当てたものは僅少でありそれほど見られていない。

## Ⅱ.『女学生の友』の発行

### （1）『女学生の友』の創刊

『女学生の友』は1950（昭和25）年4月に、

古くからの老舗出版社のひとつであった小学館より発刊された雑誌であった。当時の定価は100円（全252頁）であり、つねに懸賞応募を企画した。「メダル一万人大懸賞募集（2か月連続）」などほぼ毎号実施されていたことから、商業主義の側面があったものと思われる。また「校歌じまん」も登場（同誌同号）し、全国展開であらゆる手段や誌面編集に基づき、読者獲得に尽力した。

小学館は当時、学習別学年雑誌『小学一年生』から『小学六年生』までを発刊しており、同誌は、姉妹版として世に出したといわれている。戦前の時期に多くの少女雑誌に執筆を寄せていた、女流作家の吉屋信子は創刊号において、「女学生に贈る」という文章を寄稿している。以下にみてみたい。なお文章中の下線は筆者である<sup>2)</sup>。

いま日本は、あの戦争で激しく変わり、教育制度も六三三制となって、女学校も中学校となり、男女共学のところもある。私のかつて味わった少女期の、人生の若木によく育ちかける頃のやわらかな、ものに感じやすく、この世の美しさを少しでもくみ取らうと



【写真1】『女学生の友』の表紙の変遷

※国立国会図書館デジタルコレクションより。

2) 吉屋信子「女学生に贈る」(同誌第1巻第1号、145頁)。『女学生の友』は、創刊当初から吉屋信子の少女小説をはじめ、村岡花子の翻訳小説、少女対象のマンガ、学習ページなどから構成されていた。吉屋信子は、『少女の友』や『少女倶楽

部』(のちに『少女クラブ』に)などに数多くの小説を寄稿していた。村岡花子は『花子とアン』のモデルとなった人物であり、『フランダーズの犬』、『赤毛のアン』、『ストウ婦人』の翻訳などで知られている。

する少女の精神には変わりはないであろうことを。それを思うにつけても、その時代にあるあどけない吸取紙のように、よきにつけ悲しきにつけ、なんでも吸い取ろうとする少女の日々を、あなた方が、人生にまたとない時期を思って大事に、将来のよい思い出と、成長のための糧をくみ取るようにと祈らずにはいられない。少女の日、それはやがて人生において年齢たけた後、一番なつかしい帰らぬ日になるであろうから…

戦前期から多くの小説を執筆していた吉屋は、「なんでも吸い取ろうとする少女の日々を、あなた方が、人生にまたとない時期を思って大事に、将来のよい思い出と、成長のための糧をくみ取るようにと祈らずにはいられない。少女の日、それはやがて人生において年齢たけた後、一番なつかしい帰らぬ日になるであろうから…」と戦後の少女雑誌にも読み物としての小説の重要性を伝えている。

同誌は第1巻第1号（創刊号）より、戦前に発刊されていた少女雑誌の誌面を踏襲するかたちで、誌面が構成されることになった。また同誌では「女学生の友スタイルブック」（234頁）、「女学生の友叙情アルバム」（26頁）をはじめ、「宝塚人気スター探訪 越路吹雪、春日野八千代」（113頁）、「女学生カラーコレクション」（186頁）、「みなさまの読者文芸」、「ビューティーサロン」、「クイズスクール」、「サロンtomo」、「原稿募集」などが誌面に掲載されていた。「女学生〇〇」というコーナーが示しているように、「女学生のため」に考案された。「サロンtomo」は、少女読者らの投書欄をはじめ、作品投稿などが可能となっていた。毎号掲載はされなかったが、同誌廃刊まで継続されたものの一つのコーナーであった。

## （2）表紙と誌面

また同誌の表紙については、創刊当初から「可憐な少女」が一人掲載されていた。しかしながら、1960年代中頃より、若手の新進女優およびスタア、アイドルらをモデルとして起用し、その後は多くの女性を採用することになった<sup>3)</sup>。また50年代では、あくまで絵が中心であり、60年代では、写真になり、70年代は「女学生の友」を「jotomo」という略語に改称し、ロゴもおしゃれに表現され、アイドルを前面にして掲載された。表紙の変遷からもイメージチェンジを図ったことが見て取れよう。

同誌第1巻第3号（1950年6月号）では、「小説」が多く掲載されていた。（「少女小説 思い出のトロメライ」、「実話小説 お人形の幸福」、「純情小説 少女ロマンス」など）また「宝塚」関連の記事（「宝塚おとぎオペレッタ 陽気な町」（内海重典、63頁）や「SKD」（松竹歌劇団）の関連記事が目立つようになった。この傾向は多くの少女雑誌にもみられるようなものであり、戦後の復興に立ち向かう日本を支えていく少女たちに、夢と勇気を与えるものとなっていた<sup>4)</sup>。

また同誌第1巻第4号（1950年4月1日号）では「現代女学生言葉」（渡辺紳一郎）175～176頁）が掲載されて、女学生の言葉が数多く誌面で紹介された。

## （3）「tomo」としてのつながり、連帯

同誌では、早くから読者の共有を求めることを行っていた。それは『女学生の友』にみられる「tomo」という表現を誌面の多くで用いていたことである。当初は同誌編集部から行っていたが、すぐに投書欄などでも投稿<sup>5)</sup>者が用いるようになっていった。そのひとつ

3) 創刊号（1965年1月号）の表紙に吉永小百合が選ばれて以降、いしだあゆみ、高田美和、九重佑三子、和泉雅子、酒井和歌子、由美かおる、内藤陽子、柏木由紀子、松原智恵子、姿美千代、野添ひとみらが表紙を飾った。

4) 宝塚歌劇団や松竹歌劇団の記事については『少女クラブ』（講談社）や『少女の友』（実業之日本社）、『少女ブック』（集英社）などでも見られた。詳細

は田中卓也『『少女ブック』における読者意識の形成に関する研究』（『共栄大学研究論集』第13号、共栄大学紀要編集委員会、2015年）、同「児童雑誌『おもしろブック』に関する読者の研究』（『共栄大学研究論集』第12号、共栄大学紀要編集委員会、2014年）等を参照にされたい。

5) 同誌第1巻第3号（1950年6月号）。

に「tomoを賛う」という歌を紹介したい。「一、少女は見たり あこがれのtomo 清らかに笑める その色を 愛でつ あかず 読むうわし花よ クインのtomo」がある。すでに投稿者のなかで『女学生の友』をほかの読者と共有できるような表現をしていることがうかがえよう。また「関東、中部、東北、中四国」などの地方に住む読者らの紹介や読者の顔つきで「女学生の友会員名簿」をたびたび掲載することとなった<sup>6)</sup>。

#### (4) 少女読者の交流の場—「サロンtomo」の存在—

『女学生の友』では、先述した投書欄「サロンtomo」が掲載されていた。創刊号より掲載されていたが、もともと同欄は、「読者文芸」、「自由詩」(西条八十が選評者)、「短歌」(石川信雄が選評者)、「俳句」(中村草田男が選評者)について3ないし4ページほどの誌面が割かれた欄ははじまりであった<sup>7)</sup>。「サロンtomo」への投稿は「はがき」に限られていた。また写真を送るときについては封書での送付が許された。「送り先：東京都神田局区内一ツ橋2-5 小学館内『女学生の友』何々係」と明記しないものについては、誌面で固く注意を促された。

また同号の「編集後記」には「愛読者の皆様のご声援のおかげで、『女学生の友』はこのところ、毎月、売れきれというありさま。編集部一同、皆様のご期待に応えようと、口を開けば。口絵はどうする?とか「グラビアの別色は?」とか仕事の話ばかり。三月号では、附録に「主要学科の総仕上げ問題集」と「かべかけびな」の二つを送ります。問題集は就職なさる方、高校へ進学なさる方、また進級なさる方などすべての方が、この問題集を見

れば天下無敵の実力をつけることができるのです。また「かべかけびな」は、皆様の目を、うばうほどの美しいものです。皆さんの勉強べやに、光と希望をもたらすはずです」と記されているように、つねに「学習企画」についてのアイデアを検討することを忘れていないことは学習雑誌の老舗の小学館のイメージをもたらすものであり、注目に値する。

では内容はどのようなになっていたのか。同誌第1巻第8号(1950年10月号)をみてみたい<sup>8)</sup>。

・T子お姉様 そして編集部の先生方、友の皆様こんにちは。とても暑くなったわね。私夏休みになったので、ねころんでばかり。今日本屋さんが“友”をもってきてくださったの。もう読んでしまったの。早いでしょ? tomoがふえてとてもうれしいわ。そうそう、T子お姉様や、先生方にお礼をいうわ。附録の英会話ブックどうもありがとう。とてもとてもうれしいの。私英語大好きなの。お点もいいのよフ……うそでしょうって、ほんとうよ。この夏休みこの本でますます英語を覚えるわよ。マコちゃんとてもあわてんぼううね。でも曙さんの名前が出てきたので、とってもうれしいの。私大好きよ。曙さんが。もちT子お姉さんもよ。じゃ“友”がよくなることをいのりつつ (大阪 月江)

・T子お姉様 今日はみどりね。はじめてのお便りなのよ。どうぞよろしく。九月号の作文手帳とても助かったわ。だって、みどりたち、夏休みの宿題として、論文書けですって。みどり一番苦手なのよ。書き方もわかんなくて。でも今はわかってよ。Tomoのおかげ。これからも為になる記事

6) 少年雑誌や少女雑誌ともに、さらなる読者獲得のために工夫が施された。とりわけ『少年倶楽部』(講談社)や『少年世界』(博文館)などの大衆人気雑誌では、数万人単位での大懸賞企画が数々実施されていた。

7) 西条八十は、同誌以外にも、戦前から発刊されていた『赤い鳥』、『金の船』などの雑誌などで童謡の選評者としても活躍していた。(田中卓也「近

代児童雑誌『金の船』に関する読者共同体の研究」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第59巻第1部<教育学部門>、2007年)、同「児童雑誌『金の星』における読者意識の形成」『教育学研究紀要』第60巻第1部、<教育学部門>、2008年)などを参照されたい。

8) 同誌第1巻第8号、1950年11月1日。

たくさんおねがいね。ボツ子ちゃん、ユー  
ワクしないで。もう一つだけお話をさせて。  
みどり大の野球ファンなの。(豊川市 紅  
みどり)

「大阪 月江」「豊川市 紅みどり」の二人  
の投書である。文章中に「なのよ」、「ですっ  
て」、「なの」のように「女学生言葉」の使用  
がうかがえよう。投書欄に投稿する少女読者  
らの共有意識の表れであったのであろうか。  
女学生言葉を互いに使用することで、誌面上  
には見えない読者組織の形成が見受けられ  
る。川村邦光、渡部周子、佐久間えり、今田  
絵里香らの少女雑誌の先行研究のなかでも、  
そのような指摘は存在している。しかしなが  
ら戦後発刊の同誌においても、創刊当初に見  
られたことは一つの示唆といえよう。「T子お  
姉様」のように、少女読者は、互いに疑似姉  
妹の契りを交わし、「友の皆様」と呼びかけ、  
連帯するとことはある意味、少女雑誌の投稿  
欄の特徴といえよう。

また投書は、編集部で事前に選ばれるため  
「ボツ子ちゃん」(没書)になることを読者は  
悲しむ傾向にあった。そのため「ボツ子にし  
ないでね」(没書にしないでね)という意味の  
用語を多用する者も少なくなかった。誌面へ  
の掲載こそ、彼女らのステータスであったも  
のと感じる。創刊当初以降においても、「tomo  
のファン」、「友」という言葉を使用する投稿  
者が相次いだ。先述したが、毎号ではないが  
「サロンtomo」が同誌に掲載された。「T子お  
姉様」(「T子おねえさま」)の記述や「女友」(『女  
学生の友』の略語か)を使用する読者も存在  
し、「読者共同体」の成立がうかがえる。

同誌第3巻第2号(1952年5月号)の「広告」  
では、「私はあなたの良いお友だち!!」、「第  
一附録 女学生必須数学事典 数学が嫌いな  
方も、これ一冊で、先生のお話をすぐ理解で  
き たちまち、好きになって、よい成績が  
えられるとてもすばらしい本です」。「第二附  
録 かわいい女学生のスタイルブック」学習

にぜったいに役に立つ趣味趣向にぴったりし  
ていつまでも楽しく使える」というように、  
女学生読者に勉強を意識させる附録であり、  
ファッションへの関心を誘う、スタイルブッ  
ク附録をつける工夫がみられる。

また学習についても意識させることにも  
精力的であり、『女学生新国語辞典』、『美しい  
叙情のしおり』(同誌第4巻第1号、1952年12月  
号)、「総選挙と日本の将来」(同誌第4巻第1号、  
1952年12月号)、『時事解説』「私たちの生活は  
私たちの考えでまゐる」(毎日新聞社 木村裕  
生) 同誌同号、「学年別テスト力だめし」 同誌  
同号、『学習大附録』「公式による英文解釈のコ  
ツ」(同誌第4巻第8号、1953年10月号) など  
があった。

先述の吉屋がかつて力を注いだ「小説」も  
明朗小説、少女小説、世界伝説、写真小説、  
探偵小説、時代小説、感激実話とレパート  
リーが増加し、誌面を飾る(同誌第3巻第11  
号、1953年2月号)、「女学生スタイル教室」と  
いうように、「女学生～」というタイトルの書  
きぶり(同誌同号)、「女学生豆百科」(同誌同  
号) などであった。

「女友」という略語が使用されることも頻  
繁であった<sup>9)</sup>。

- ・「女友がくると、第一に附録に飛びつくの  
よ。なかでも、事典などはとてもうれしい  
のよ。次に探偵小説の「紫リボンの秘密」  
を読むのよ」(小松春)
- ・「律子、はじめてになるんですけど、お仲  
間に入れてね。私は今年で高校1年なの。  
奄美大島ってとても狭いので、三方が山で  
す。絵に囲まれてとてもけしきがいよ。  
T子お姉様も、遊びにいらしてね」(福田律  
子)

かくして、『女学生の友』は、「サロンtomo」  
を介して、少女読者が集うことになった。彼  
女らは、「少女読者共同体」の一員として、「い

<sup>9)</sup> 同誌第3巻第11号、1953年2月1日。



つまでも少女であり続けたいと懇願した。共同体の一員の証に、「女学生言葉」の使用、「女友」の略語の使用、「お仲間に入れてね」の表現にあるように、呼びかけや連帯というスタイルでこぞって表現した。

#### (5) 投書欄「サロンtomo」の学校化と編集部の総体「T子」の存在

1950年代中頃から後半にかけ、同誌の誌面に変化が見受けられるようになった。以下の引用文をみてみたい<sup>10)</sup>。

どうして今月は、こんなにおちゃめさんやおてんばさんばかりあつまってしまったんでしょう？ほんとに、いつもとは、うって変わってサロンの騒々しいってことったら。まるで学校のお休みの時間のようよ。もちろん中には、女友に対するまじめな忠告や意見を寄せられた方々も、いつものとおりにいるにはいるんです。でも、そのワイワイと楽しむひと時を過ごした方とまじめなご意見を述べたい方をいっしょにしたら、それこそこのおへやは大混乱に陥っちゃったんだろうと思うんです。今月はおちゃめ組のひとり天下にしたの。

「サロンtomo」に、「似顔絵コーナー」、「先生方の住所」が掲載されるようになる。また「サロンtomo」(第一会場)、「サロンtomo」(第二会場)に分化することになり、「サロンtomo」が、女学生読者らの「学校」のような存在になったことがうかがえよう。

また次の投書についても見てみたい<sup>11)</sup>。

ひとりひとりが、ほかのだれもが、まねることのできない尊いものを持っているのだと思います。だから個性をいかすことと、プライドを持つということは、とてもたいせつなことだと思いますわ。みなさまのお考えはいかが？ではサロンのみなさま、それからT子さまも、おからだは十二分に気を付けてね。

さようなら」(茨城県真壁郡真壁町大字北椎尾三九二 藤田洋子)

それに対するT子の回答である<sup>12)</sup>。

<T子>藤田さんの意見大賛成よ、私たちひとりひとりが夜空の星のように、美しい光をはなつように、お互いにしっかりやりましょうね。

T子は「編集部の総体」であったのか。読者からの相談についての回答も行っている。読者同士の交流の場であった「サロン」は、読者と編集部との交流の側面も見られるようになった。少女読者らにとって、「T子」がもはや、かけがえのない存在にまでなっていた。

#### (7) 「ジュニア」表記の登場

同誌第10巻第5号(1960年8月号)ごろより、「ジュニア」という表記がみられるようになった。以下にみてみたい<sup>13)</sup>。また同号より「サロンtomo」は、「T子ちゃんへのおたよりコーナー」と改称とされた。

ハロー T子ちゃん。わたしは奈良に住む高1のジュニアよ。学校は女子高でね柔道部に入っているですよ。」(奈良県大和郡山市泉が丘 宮下ちづこ)

「初秋に贈る 女学生の友のステキな附録ジュニアのオシャレに 心の友に なくてはならないものばかりです」

附録「初秋の手芸・スタイル・ブック」  
ジュニアの楽しいオシャレに欠かせない手芸・スタイルの宝典・・・この一冊であなたの魅力は100%

「ジュニア短編小説」の募集は開始された。以下はその広告である<sup>14)</sup>。

10) 同誌第7巻第9号、1957年12月1日。

11) 同上。

12) 同上。

13) 同誌第10巻第5号、1960年8月1日。

14) 同上。

## 「ジュニア短編小説募集」

### 応募のきまり

①資格…中学校、高校に在学中のかた、または同年齢のかた、いずれも女性に限ります。在学中の方は在学証明書、お勤めの方は勤務先の証明書、おうちで働いている方は、中学校の卒業証明書を添えること。

「ジュニア小説」が1963年ごろより誌面に掲載。「ジュニア・キッチン」、「ジュニア・アドバイスルーム」（訪問したとき、されたとき）（同誌第17巻第4号、1966年12月号）なども「ジュニア」の用語を多用する傾向になったといえる。

### （8）「性」をとりあつかった内容の掲載

同誌第14巻第6号（1964年9月号）頃より、「思春期の男女交際・心の秘密・からだの秘密」を掲載し、「正しい交際三つのルール」、「思春期 その心の動き」、「私の体験 あなたの体験」といったいわゆる「性」を取り扱った記事内容が掲載されるようになった。同誌同号には「あなたの、より豊かな愛情生活のためにもあなたの心とからだの成長にあわせて一步一步確実に、しかも堂々と歩んでいってほしいのです。『女友』はいつも、あなたの最良の話し合いの場であることを願っています<sup>15)</sup>。と『女学生の友』が「性」を取り扱っていく雑誌であり、少女読者の相談、悩みに責任をもって応じることを宣言した。

「性」に関する記事は、やがて「男女交際」に関する記事へと展開を遂げていく。「男女交際」に関する記事は、『女学生の友』（夏休み増刊号、1964年8月号）にて特集号を発刊し、「外国のジュニアはこんな男女交際をしている」、「王選手をめぐる三人のガールフレンド」、「スターはこうしてチャンスをつかんだ」、「バカンス旅行へのご招待」などを誌面に掲載した。また「先生が受けた交際の相談と回答」（同誌第16巻第12号、1966年1月号）においては「もっと先生を利用しよう」とか同誌が「話し合いの場」ということを読者に

誌面を通じて伝えている。「先生はジュニアの味方！」という表現を用いて、「先生は決して、授業をするだけの人ではありません。私たちはもっともっと先生を利用しなければなりません」と伝えている。すなわち不純な読者を誌面から排除する試みを実施していたのである。さらに「特別公開 文通交際が育てた美しい友情」を掲載し、恋愛も不純なものではなく、「清く、正しく、美しく」、「素晴らしい友情のめばえ」、「男子校と共学校の男子はどう違う？」（同誌第17巻第4号、1966年12月号）では「ボーイフレンドの相手なら共学校の男子、結婚するなら男子校の男子が断然よ。近頃東京のジュニアの間でささやかれていることばです」と示しているように、健全な恋愛を求める誌面づくりを目指すようになった。

さらに同時期には「男子登場」（イケメン男子中学生、高校生を写真で紹介するコーナー）、「男の子研究」（男の子と文通して、男の子を知ろう。全国から文通希望の男子を紹介するコーナー）が相次いで新設された。

では、1960年代後半に出版されることになった「女学生」と冠した雑誌『女学生コース』はどのような雑誌であったのか。次章にみていきたい。

## Ⅲ.『女学生コース』（学習研究社）の登場

### （1）『小説女学生コース』発刊の経緯刊

『小説女学生コース』は、1967（昭和42）年1月1日に同誌第1巻第1号が発刊された。発行所は学習研究社であり、当時「受験雑誌の老舗」とよばれた大手出版社であった。発行人は古岡秀人であり、編集人は下野博であった。同誌の新年創刊号は150円（全380頁）であった。基本的には1冊あたり120円から150円が平均価格であったとされている。また頁数は大きな変化はなかったようである。また雑誌の仕様はA5版サイズとなっていた。同誌第2巻第4号（1968年4月1日号）には「三百万のジュニアの話題の雑誌『小説女学

<sup>15)</sup> 同誌第14巻第6号（1964年9月1日）。



【写真2】『小説女学生コース』の表紙の変遷  
※国立国会図書館デジタルコレクションより。

生コース』！この雑誌こそ、あなたの夢と希望をゆたかにはぐくむ、唯一の小説月刊誌」といったキャッチフレーズをうたっている。時代の流れであったのか、創刊間もない頃に同誌は「ジュニア向けの少女小説雑誌」という意向が反映されていたのである。

## （2）表紙および同誌にみるキーワード

同誌の表紙を見てみると、きれいで、かわいらしい少女を描写したものがほとんどである。後半になるにつれ、「モデル」のいでたちの少女が描かれた。同誌に掲載されているキーワードを探てみると、「少女」、「青春」、「初恋」、「恋愛」、「友情」、「学校」、「仲間」、「乙女」などが見られる。この中でも特に「少女」、「青春」という言葉がよくみられる。「少女」や「青春」が多いことから、少女読者がこぞって読んでいたことや青春の時期の少女であることがうかがえる。「恋愛」、「友情」、「学校」、「仲間」、「乙女」という言葉からもわかるように、少女（乙女）らが学校において恋愛や友情づくりを経験していたことが浮かび上がる。

## （3）『小説女学生コース』の目次および誌面内容

同誌の創刊号の目次（1967年1月1日号）を見てみることにしたい<sup>16)</sup>。なお文章中の下線は筆者が施した。

<目次>（1967年1月1日号 創刊号）

二大長編小説特集

- ・（純愛読切小説）「若草燃ゆる」（富山健夫・吉田郁也画）

城下町を背景に古い風習の支配をうけながら青春の意味をさぐる、少年と少女を描く大作。

- ・「鳩のくる丘」（大木圭・谷俊彦画）

新しい母を迎えながら、自分の心のうそにたえられず悩む少女の心理を描く力作

（特別問題小説）

- ・「初めてのラブレター」（山中ひさし・中沢潮画）

（ユーモア特集ベスト2）

- ・「きらい！きらい！きらい！」（中村八郎・西島武郎画）
- ・「びじん・ザ・びじん」（佐藤愛子・小林裕画）
- ・「イジワル学園—国語教室—」（253）

<sup>16)</sup> 『小説女学生コース』創刊号（1967年1月1日）「目次」。



- ・「女学生ライフ」(108)
- ・「三分間テスト」(260)
- ・(長編連載まんが)「けがれない慕情」(花村えいこ)(189)
- ・(世界名作物語)「少年十字軍」(原作B・ブレヒト、高橋真琴画)(237)
- ・(初恋物語競作)「雪の降る夜の物語」(三島正・浜田伊津子画)(205)  
足の悪い少女がさぐる真実の愛の姿は
- ・「蝶の箱」(桐村杏子・田中ひでゆき画)(220)  
心にくっつかの秘密の扉がある
- ・(世界文学の旅)「若草物語」(オルコット)(7)
- ・(世界名作民話)「雪姫」(A・N・オストロフスキー・森康次画)(17)
- ・(女学生ジャーナル)「ブックガイド」(324)
- ・「映画ガイド」(326)
- ・「テレビガイド」(328)
- ・「舞台音楽ガイド」(330)
- ・(五分間世界名作文庫)「初恋」(365)
- ・「熊のプーサン」(368)
- ・「椿姫」(370)
- ・(グラビア)「加山雄三、由美かおる、西郷輝彦、布施明」(185)
- ・懸賞募集と発表(374)
- ・ペットネーム募集(379)
- ・次号予告(372)
- ・編集部だより(380)

同誌の目次を見てみると、「小説」が多く  
の誌面を割く中で、「女学生ライフ」、「女学生  
ジャーナル」のようにタイトルに「女学生」  
とつく記事や「三分間テスト」のように学習  
的な記事もみられる。また「びじん・ザ・び  
じん」、「イジワル教室」のようなユニークな  
記事のほか、「グラビア」、「まんが」などもみ  
られる。小説を中心とした誌面内容であるこ  
とがうかがえる。

『女学生コース』は、また「女学生」と冠  
したネーミングであるものの、女学生の記事

のほかにも長崎の田舎から上京した一少女  
が、紡績工場に勤務し、女工の道を選び、自  
分の夢をかなえるという「紡績女工の青春」  
(同誌第5号)などのノンフィクション記事な  
どを取りあげている。この影響か「ペンパ  
ルコーナー」では、「働きながら学ぶ全国の定  
時制高校に学ぶ友と手をつなごう」(島田ヒロ  
子・高2)、(中井町子・16歳)、(蔵重順子・高一)  
らが応募している<sup>17)</sup>。また「働く友よ、悩み、  
苦しもうちあげ、励まし合いましょう」(原一  
美・十七歳)、(高下チヨノ・十六歳)、(桐原三  
恵子・十五歳)などの告知もみられる。なお、  
蔵重は岐阜県羽島市の日興毛織羽島工場、桐  
原は東京都荒川区のエムエス精機製作所勤務  
であったことがわかっている。若いころから  
労働に携わった少女らが同誌を購読していた  
ことが垣間見れる。先述した『女学生の友』  
の読者には見られない、女性労働者の読者の  
存在が確認できるのである。しかしながら自  
らを劣等生とし、学習意欲のなさに悩む女子  
学生をはじめ、「高校進学」に悩む女子学生、  
さらには両親と生き別れた少女であるが、明  
るい性格の持ち主であることを公言する少女  
読者など、さまざまな境遇にある少女読者が  
存在していた<sup>18)</sup>。

また、「フレッシュメンズクラブを結成しま  
した。女コースファンの男子諸君よ。入会し  
ましょう」(久保田悟)というように、「女コース」  
と略語を使用した男性読者も存在してい  
たり、「こんにちは。私は創刊当初以来の愛読  
者だけど、本屋でいつも売り切れているので  
ガッカリするの。それほど女コースは人気な  
のね。クラスでもすごいよ。男の子なんか  
いつもワリコンできてぶんどってしまうの。  
男の子に負けてたまるか、女の子も大奮闘!  
でも取られるのよ。やだーっ。こんな騒動を  
起こす女コースが憎いわ」と伝える藤原幸子  
のように、同誌の奪い合いで学校が盛り上  
がっている様子を伝える読者も存在した。

<sup>17)</sup> 同誌第5号(1967年5月1日号)。

<sup>18)</sup> 同号。「ペンパルコーナー」には毎月10～15通ほ  
どの投稿者からの告知が掲載されていた。

#### (4) 同誌恒例の「読者座談会」

同誌の内容の特徴のひとつに「読者座談会」企画がみられる。中学生から高校生、さらには若年女性労働者にいたるまで幅広い女性層をターゲットに将来の夢や希望、悩み、不安を吐露させるものであった。どのような内容であったのか。その一部をご紹介します<sup>19)</sup>。

#### ◆「読者座談会」「なんでもやってやろう！」 ＜ご出席のみなさん＞

飯島京子(高1)、佐藤留梨子(高1)、高橋ひろみ(高1)、波多野雅代(高1)、山口幸恵(高1)  
本誌：現在高校生活を送っている五人の読者のかたがたの語る、現代っ子の生活感ってどんなもの？

高橋：女学生時代ってきくと、女の人がすごく胸に思いを秘めちゃって、十字架にお祈りしたり、おねえさまなんていつてる(笑)歌のイメージが強くて、私たちにはピッタリしないみたいじゃない？

波多野：そうよね、みつあみにして男女七歳にして席を同じうせず、っていうでしょ。手も繋いじゃいけないみたいね。(笑)

佐藤：昔の感じがするのよ、まわりに男の人がいなくて、女だけの世界みたいだね。

飯島：そんな古い感じだけかしらね？友だちとふざけたり、笑いあったり、すごく明るい感じもあるわ。

高橋：女学生時代というより、単に学生時代のほうがピッタリじゃないかしら？

飯島：それもそうね。

#### ◆バツグンの行動力

本誌：なぜ学生時代といったほうがぴったりするのですか？

高橋：女学生時代というと、男と女が高校生活で全く違う経験をするみたいでしょ。だけど実際は男子も女子も差はないんじゃないかしら？

山口：確かにそれはいえるわね。わたし高校にはいっておどろいたんだけど、校則があまり守られていないと読んだり、勝手なことしてますね。昔の人が聞いたら、きっと腰抜かすんじゃないかしら？(笑)

波多野：きびしいなあ(笑)

佐藤：ことばづかいもわるいんじゃない！(笑)わたしなんか男兄弟の中で育ったから、まだぼくなんてことばをつかっちゃうもの(笑)

高橋：悪い面ばかりあげないでよおー。(笑)男っぽくなったということじゃないけど、行動力があるんじゃないかしら。だから学園の問題なんかにしても協力しちゃって、みんなでもっとよくしていこって盛り上がるでしょ。

飯島：文化祭には先輩の歌手がきてうたうことになったんだけど、生徒会で反対して拒否しちゃったりしてね、

山口：うちの学校でも、講堂の建設問題で学校と話し合おうということになったけど、そのときなんか、校長先生はどこかに姿を消しちゃうし、先生方も教員室にこもって出てこないんだもの(笑)

高橋：先生のほうがふるえあがっちゃうのね(笑)

佐藤：全学連にも女の人がいるんでしょ。昔なら考えもおよばなかったと思うわ。

#### ◆夢もあこがれも大きい

高橋：純愛小説なんか読んで、涙流す人もあるからおセンチでもあるわね。

佐藤：でも泣いた後はサッパリしちゃうわね。

飯島：おセンチになって詩なんかつくったりするわ。

山口：何か人とかものとかにあこがれるという、面は強いですね。その一つがグループサウンズじゃないかしら。

高橋：恋に恋してるってというところがあって、ジュリーを星の王子さまなんて

<sup>19)</sup>「なんでもやってやろう！」同誌第3巻第2号(1969年2月1日)。

いって（笑）

ほんとの恋人みたいに錯覚して追いまわしたりしてね。

**波多野**：昔でいう中村錦之助、長谷川一夫なんていったのと同じよね。

**高橋**：だから今は現実的にわたしたちはグループサウンズが好きなんであって、形は違うけど、夢とかあこがれという要素では同じなんじゃないかしら。

**佐藤**：通学電車で会う素敵な男の子の噂なんかもするしね（笑）

**山口**：そうね。男女交際なんかも昔は盛んじゃなかったと思うけど、今は校則で禁じられても、陰でこっそりやってますね。

**佐藤**：男の子とつきあうのは悪いことではないんじゃないかしら。わたしなんて男っぽく育って木登りが好きだったし（笑）。中学のときかも男の友だちが多いくらいだったから、男の子がいないと心細い感じがするわ。

**飯島**：全員が男の子に関心があるんだからね（笑）

**波多野**：よく男の子に手紙をあげたなんて話も聞くしね。

**佐藤**：この世には男と女がいるんだから、つきあうのが自然よね。

**高橋**：文化祭なんかも、女子校なのに男女半々ぐらいになるしね。

**飯島**：先生も、おおいに連れてきなさいなんて……（笑）

**山口**：だけど、こっそりやるなんてみだらな感じがするわ

**飯島**：山口さんのいうことわかる面もあるわ。服装を派手にする人もでてくるでしょ？

**佐藤**：制服のスカートでも、前は長くしていたのに、短く演出したりしているわね。

**山口**：派手にしたいなら、学校以外の場所で、私服の時にしたらいいと思いましたね。

#### ◆青春を大切に

**本誌**：そろそろみなさんにとって女学生時代はどんな時代なのか、結論を出したいと思いますが。

**波多野**：やりたいことがやれる時代ですね。

**佐藤**：二十過ぎれば制約が多いし、やりたいことができるのは今ね。

**山口**：女性の職場も多くなったし将来の目標を実現するために大事な時期といえますね。

**高橋**：やりたいことができるってこと、そして可能性が大きいってことは、青春そのものって感じだわ。わたしなんかやりたいことを親に反対されたら家出しちゃう（笑）

**飯島**：ふだんは意識していないけど、ほんとうにたいせつにしくちゃ。

**本誌**：みなさんが、将来、社会に出てからのことを強く意識していることがわかりました。ほんとうに貴重な時期ですから、たいせつに過ごしてくださいね。（終）

当時の女子高生であった飯島京子(高1)、佐藤留梨子(高1)、高橋ひろみ(高1)、波多野雅代(高1)、山口幸恵(高1)の5名による座談会の様子である。男子学生の話から、高校生の恋愛事情、さらに将来にいたるまで彼女たちが赤裸々に語っている。参加者5名の言葉にもみられるように、女学生という言葉のひびきについて「昔の感じがするのよ、まわりに男の人がなくて、女だけの世界みたいだわ」(佐藤言)、「そんな古い感じだけかしらね？友だちとふざけたり、笑いあったり、すごく明るい感じもあるわ」(飯島言)、「女学生時代というより、単に学生時代のほうがピッタリじゃないかしら？」(高橋言)、「それもそうね」(飯島言)の一連の会話にもみられるように、むかしの「女学生」のイメージとは一線を画すのではという話になっている<sup>20)</sup>。また恋愛

<sup>20)</sup> 「なんでもやってやろう！」同誌第3巻第2号(1969年2月1日)。

についても、「男と女が高校生活で全く違う経験をするみたいでしょ。だけど実際は男子も女子も差はないんじゃないかしら」(飯島言)にみられるような、男女平等の自由恋愛の風潮のもとで、「男の子とつきあうのは悪いことではないんじゃないかしら」(佐藤言)と古き女学生のイメージを払拭させるニュアンスの発言が目立つ<sup>21)</sup>。さらに「女学生時代のイメージ」をきかれ「二十過ぎれば制約が多いし、やりたいことがでえるのは今ね。(佐藤言)、「女性の職場も多くなったし将来の目標を実現するために大事な時期といえますね」(山口言)、「やりたいことができるってこと、そして可能性が大きいってことは、青春そのものって感じだわ。わたしなんかやりたいことを親に反対されたら家出しちゃう(笑)」(高橋言)、「ふだんは意識していないけど、ほんとうにたいせつにしなくちゃ」(飯島言)の一連の会話から、「青春」であることから大切にしないといけない時期であることを伝えている。「男尊女卑」の風潮はもはや古いものであり、男子に気にせず、女子も同じように将来の夢をかなえるために前に進むことをそれぞれが感じている。

『小説女学生コース』は、ジュニア対象の少女雑誌でありながらも、ファッションなどのトレンドを追うというよりも、むしろ女学生の現状あるがままを誌面に掲載するといった、等身大の女学生をイメージした雑誌の側面があったのではないだろうか。「誌上討論会」はその事情を映し出す格好の企画記事であったものと考えられる。先述の『女学生の友』誌には、そのような企画も少なく、小説、物語中心の誌面から、ファッションやまんが、など時代の流れを重視した誌面作りになっていた。「女学生」と冠する少女雑誌二誌であったが、創刊当初から誌面内容は二誌が別方向にむけて進むことになった。

#### Ⅳ. おわりに—『女学生の友』と『女学生コース』の展開と限界—

『女学生の友』は1950(昭和25)年に発刊された月刊雑誌であり、中学生や高校生の少女などの年齢層を主な対象に、『女学生コース』は1967(昭和42)年に少女を対象にした雑誌として発刊された。両誌ともに戦前期の少女雑誌の誌面を参考にしたものとして発売されたが、ファッション、マンガ、芸能などの影響を受けていくことになり、『女学生の友』はのちに“jotomo”と改称し、教養を残しつつもファッション雑誌的な特徴に流れていくことになり、『女学生コース』は、時流に流れさながらも、「女学生」対象にこだわり続け、伝統と流行のはざまで誌面づくりに模索を繰り返すことになった。

戦後の「女学生」を対象とした二誌は、女子中学生・高校生ら「ジュニア」世代を誌面内容や附録などを工夫しながら、巧妙に読者に取り込んだ。誌面づくりのために、生き残りをかけて少女の心を引き留めることに苦心した。しかしながら両誌は、発刊および廃刊の時期は異なるものの、「女学生」としての教養の習得をめざすことは忘れておらず、クイズや懸賞形式を採用しながらも誌面に学習教材としてのものを掲載し続けた。『女学生の友』はその後、ジュニア向けファッション誌『プチセブン』に、『女学生コース』は、『中1コース』、『高1コース』のように学習内容を残しながらも、ファッション、マンガなどの要素をといたものへと変化を遂げることになり、「娯楽」や「流行」を求める少女雑誌の台頭を促すことになった。

#### 【参考文献】

- 1) 小山静子・今田絵里香・赤枝香奈子編『セクシュアリティの戦後史—変容する親密圏・公共圏—』(京都大学学術出版会、2014年)。

<sup>21)</sup> 「なんでもやってやろう!」同誌第3巻第2号(1969年2月1日)。

- 2) 今田絵里香『“少年”“少女”の誕生』(ミネルヴァ書房、2019年10月)。
- 3) 今田絵里香『双書ジェンダー分析 “少女”の社会史』(勁草書房、2007年)。
- 4) 渡部周子『つくられた“少女”“懲罰”としての病と死』(日本評論社、2017年)。
- 5) 田中卓也「戦後少女雑誌『少女サロン』における少女文化の胎動」(『関西教育学会年報』通巻第40号、2016年)。
- 6) 田中卓也「集英社雑誌『少女ブック』・『明星』における読者像」(日本保育学会第67回大会ポスター発表済)、2014年5月。
- 7) 田中卓也「光文社刊行雑誌『少女』における読者意識の形成」(日本子ども社会学会第26回大会口頭発表済、2016年6月)。

#### 【付記】

本稿は、関西教育学会第71回大会（関西教育学会第70回大会、2019年11月16日口頭発表済）に加筆修正を加えたものである

#### 【謝辞】

本研究資料として取り扱った『女学生の友』・『女学生コース』の二誌について、熊本県菊陽町図書館所蔵「少女雑誌コレクション」の担当職員の方々に、ご多忙中にも関わらず、多大なるご厚意を賜りました。ここに記して謝意を表したいと思います。



